

「二世の縁」の場合

―各稿本の本文を比較しながら―

木越 治

『春雨物語』の「二世の縁」には、文化五年本・天理卷子本・天理冊子本の三種の稿本が存在している。これらの関係については、前稿「春雨物語序説―諸本研究史の試み―」（金沢大学教養部論集 人文科学篇第23・2号 昭和60年3月）にまとめたように、冊子本を初期の草稿と考へ、卷子本は最終稿の断片であるとする古典文学大系『上田秋成集』（岩波書店、昭和34年7月刊）解説の中村幸彦氏の説、卷子本↓冊子本↓五年本という順序で書かれたとする浅野三平・八田雅広両氏の説の二つがあり、さらに私はこの両説とも異なる卷子本↓五年本↓冊子本という順序を考えたのである。こうした諸説が生まれるのは、文化五年本以外の稿本に残る部分が少なすぎることの他に、富岡本のごとく確実に最終稿とみなされる稿が存在しないため比較の基準が立てにくい等の理由が考えられる。しかし、そういうことをいくら言っても問題の解決にはならないわけで、とりあえずここでは、現存する各稿本の具体的な比較を通して「二世の縁」の本文に関する諸問題を検討して行きたいと思う。

一、卷子本の本文について

天理卷子本に残る「二世の縁」は次のごとき断片である。（翻字の要領は天理冊子本のときと同じである）

（前欠）すゝむ事いとたふとかりけり。あるじも

嫁子出したてゝ喜びぬ。さて入定

の定介と名づけて庭はき男とする

より外なし。古き歌に、 我やどの木

末の夏になりしよはいこまの山もみ

えず成にき とはよんだり。今は冬なり。

木の葉おちゝりてはらふにいとまなし。

定介にかはりてよむ。 いこま山

朝はれたりと見し空ははやくもかくす

夕しくれかな 母もよむ。 飛鳥川

瀬となりし人の跡はあれともとめし人の

いつの代にか絶し 定介心もなければ

蜘蛛打ころして心よしとす。 僧なりし

もかくおに・しく成たり。五とせばかり
在て、この郷のまづしきやもめ住に
簪にとられ行。よはひいくつとも己も
しらねば、よく女の心をとる。立はしりて
かせげども、佛因のまづしきに家は

む

さふし。女は腹たつ事時・にて

子を膝にすゑて、もとのてゝ様こひしと（以下欠）

この卷子本の本文を文化五年本とくわしく比較対照する作業は、すでに八田氏が試みているので、ここではくりかえさないでおく。卷子本の内容は、掘り出されてからあとの定介の様子を描いており、文化五年本の後半部のほとんどの部分に対応しているわけであるが、たとえば、卷子本の末尾の

立はしりてかせげども、佛因のまづしきに家はさむし。女は腹たつ事時・にて子を膝にすゑて、もとのてゝ様こひしと（以下欠）

という表現と、これ対応する五年本の

かの入定の定助は竹輿かき荷かつきて牛むまにおとらず立走りて猶からき世をわたる。あさまし、佛ねがひて浄土に至らん事か多くぞ思ゆ。命の中よくつとめたらんは家のわたらひなりと、是等を見聞し人はかたり合て、子にもをしへ聞ゆ。かの入定の定助もかくて世にとゞまるは、さだまりし二世の縁をむすびしはとて人云。其妻となりし人は、何に此かい・しからぬ男を又もたる。落穂ひろひて獨すめりにて有し時戀し。又さきの男今一たび出かへりこよ。米麦肌かくす物も乏しからじとて、人こればうらみなきてをるとなん。いといぶかしき世のさまにこそあれ。

という部分を比較してみるだけでも、その表現上の優劣は明らかであろう。「よみぢかへり」した定介が送って行かねばならぬ「からき世」の有様、「二世の縁」を結んだはずの妻からも「かい・しからぬ男」としてうとまれねばならぬ「いぶかしき世」のことがわりが五年本には見事に描き出されているのに対して、卷子本にはそうした描写は見られない。また、定介の姿を見て「きつね狸に道まどはされしよ」と仏教の桎梏から解放されたことを喜ぶ母刀自も、逆に人間の生が牛や馬と変わらぬものであると嘆く里長の母も登場しない。三首の和歌もいたずらに冗長なだけであり、どこからみても、これが五年本よりもあとに書かれたとは考えられないのである。

この点では、浅野氏・八田氏と同じ結論になるわけであるが、中村氏も『天理図書館善本叢書秋成自筆本集』（八木書店、昭和57年7月刊）ではこの「二世の縁」を卷子本の影印から省くという処置を取っているので、古典大系解説の説は訂正されたようにも思われる。ただ、これだけでは、氏が卷子本「二世の縁」をどのように位置づけているのかまだはつきりしないので、ここではとりあえず、卷子本「二世の縁」は、本文を比較してみる限り、三種の稿では最も早く書かれたものと考え、以外にないことを再度確認しておきたいと思うのである。

二、冊子本について

浅野氏は冊子本の本文を五年本と比較しつつ、冊子本には「草稿としか考えられないよ

うな粗雑な筆の走りを感ずる」と述べている。そして、この「筆の走り」は、前出の卷子本「二世の縁」にも見られるもので、両者（すなわち冊子本と卷子本）は「同じ時期に秋成によつて書かれたと考えられる」と述べている。また、冊子本の重複部分（三十七ウの末尾三分分）についても、「平仮名が多く、書体は崩れていて、現存のなかでは一番の草稿かと考えられる」と述べており、結局浅野氏は、冊子本が卷子本と同じ時期に書かれたものであることを一貫して主張しているのである。

しかし、そうではないと私は思う。まず、冊子本の重複部分（三十七ウの末尾三分分）が氏のいわれるごとく「現存のなかでは一番の草稿」であるかどうかという問題についてみていきたいと思うが、冊子本のこの部分は「目ひとつの神」末尾から続いている部分で、三十七オウ全体が三十五オウと重複しているのであるから、氏の結論を承認するためには、この一丁分全体について氏のいわれるごとく特徴がみられるかどうかを検討しておく必要がある。それゆえこの一丁分について、対照表を作ったうえで検討することにしよう。三十五オウの本文（以下Aとする）を左側に置き、三十七オウ（以下Bとする）を右に置く。（両者等しいところについてはBの方を「・・・」で示し、異なるところは適宜空白や□□などを用いて対照できるようにした）

直して空にあふき上る。猿と兎は手 打てわらふ。山伏待と

りて腋にはさみ飛かけり行。法師は、あの男よ・とて晒ふ

袋とりて背におひ、ひくきあしだはきてあゆむ。

かせ立て行。法師とかんなぎは人なり。妖に交れど魅せられず。

かん人の 齢 はしら髪づきていまだ百歳にいたらず。夜明は

なれて森陰の 庵 にかへる。女房わらはゝこゝにとまれ。和

上の御やどり有ぞ。あるじして饗膳せよとていざなひ入て、

何をがなとて日なみ とり出 て見す。墨くろ・と数百年の

事 しるしたりと、たれか見し人の物がたり 也とぞ。今も

つたへていづちにか蔵めたらん

いく．．．．．したの
幾世をかおいその森の下庵に

．．．むかし．．．．．
ふりし 昔 の物がたりきく

二世の縁

．しろ．つき．木．．．．．は．．．．．
山城の高槻の樹の葉も散はてゝ いとさむし。古曾部とい

．郷．久．

ふ所に年ひさしく

仮名と漢字、助詞の有無などの細かな違いを除けば、目につくのは三箇所、すなわち、三〇四行目の「AⅡあゆむ BⅡから・とひゞかせ立て行」、七行目「AⅡあるじして饗膳せよとて BⅡ(なし)」八行目「AⅡ何をがなとて BⅡ(なし)」である。しかし、この程度の違いは、書き直しの段階で生じたものと考えてならぬ都合ではない。念のため、引用部分のはじめの方に対応する他の稿本の本文を掲げてみる。

(佐藤本) 神、興に乗りて袖ひるがへせしかば、こゝに大風吹おこ

りて林木たをれねど、どよめきおこりしほどに、比良・日枝・伊吹も風雲につまれ
て見えず成ぬ。この若き男は是にあやかりて地を吹上られ、喬木の枝に手をむすびと
づめて、我ふかしむる風には損害せずと聞しをためみてひそまりをる。兎と猿は手打
たゝきて紙鳶よくのぼりたりと指さしつゝわらふ。

(五年本) この若き男をあをぐ、空に上らせたり。山ぶしとり
つたへて、袖かづかせ、空行ほどに、此あしたに母の前に落来たる。いなやと問へば、
水たまへ。おそろしき事物かたりして聞せ申さんとて、ねやに入たり。さて、かしこ
には、夜明るまで飲うたひたるに、若き男の空に上るを、猿とうさぎは手打てよろこ
ぶ。

(富岡本) 神は扇とり直して、一目連がこゝに在てむなしからんや
とて、わかき男を空にあをぎ上る。猿とうさぎは、手打てわらふ。木末にいたりて、
待とりて、山臥は飛立、この男を腋にはさみて、飛かけり行。法しは、あの男よ・と
て笑ふ。

こうして比較してみると、佐藤本・五年本と冊子本・富岡本とは本文の性格が相当に異
なっていることがわかるであろう。佐藤本・五年本はいずれも「猿とうさぎは手打てよろ
こぶ」というあたりまでを引いておいたのであるが、これらには、空を飛ぶ若者の言葉が

あつたり、若者の母親が登場したりするのに対して、冊子本・富岡本にはそうした描写は全くない。そうした点から見ても、富岡本と冊子本はきわめて近い関係にある本文だといえるが、それでも冊子本のAとBの関係ほどに近いとはいえないし、また、いうまでもなく、冊子本Bの本文に「現存のなかでは一番の草稿」とされている佐藤本に近い要素が見られるわけではない。

以上の検討結果からみて冊子本三十七ウの末尾三行分が浅野氏のいわれるごとく「現存のなかでは一番の草稿」と考えられないことは明らかであろう。「書体は崩れて」いるというが、私の目からみると三十六オウなどと特に異なっているとも思われない。三十七オウに太い斜線が引かれていることからすれば、三十七オウは全体として三十六オウの書き損じと考えるべきであると思われる。

また、この一丁分を他の稿本と比較したことは、実は、卷子本↓五年本↓冊子本という順序で書かれたとする私の説の証明にもなっているのである。つまり、私は、このような本文の比較をもとに「目ひとつの神」は、佐藤本↓五年本↓冊子本↓富岡本という順で書かれたと推定したのだが（最近では、勝倉寿一氏も同じ結論に達している）、この推定に対する説得力ある反証が出されない限り、冊子本「二世の縁」も五年本と富岡本の中間に位置する稿と考えざるをえないのである。しかし、そういつてしまつてはミもフタもなくなつてしまうので、この結論が本文自体の比較からも承認されるかどうかについて、以下、検討を続けることにしよう。

三、冊子本と五年本の比較

まず、冊子本と五年本の本文を適宜段落に区切りながら対照し、問題点を取り上げていくことにしよう。なお、比較にあたっては、文化五年本の本文（底本は桜山文庫本、以下《桜》と略、問題のある箇所は適宜注記したが、漢字と仮名や送り仮名の有無程度の違い、及び桜の朱による訂正や挿入が漆山本（《漆》と略記）や西荘文庫旧蔵本（《西》と略記）と同じ場合については省略した）を左側に掲げ、それと対照させるかたちで冊子本の本文（三十五ウからの部分）を右側に掲げる。（前節と同様、両者等しいところについては冊子本の方を「・・・」で示し、異なるところは適宜空白や□□などを用いて対照できるようにした）

・・・・・・・・・・・・・・・・□□・・・・さむし

山城の高槻の樹の葉 散はてゝ山里いとさむく

□□□□□□□□・・・・いふ・・・

いとさう・し。古曾部と云所に

・□ひき・・・・□□□□人・・・・

年を久しく住ふりたる農家あり。

家の子・・・・召つかひ、

山田あまたぬしづきて、

・□□□□□□□□□□、□・・・也。

年の豊凶にもなげかず、家ゆたかにて、

まず、冒頭部分五行についてみると、全体として冊子本は五年本より簡略な表現になっているといえる。一行目に「山里」、二行目に「いとさう・し」等の語句がないこととか、三行目が「年ひさしく住人あり」と簡単な表現になっていることなどがすぐに目につく例である。四行目以下も同様であるが、しかし、このことから直ちに冊子本が先に書かれたと決めることはできない。冊子本の表現の不十分な所を文化五年本において補ったとも考えられるが、逆に、五年本の冗長な表現を刈り込んで冊子本のように変えたともみることも可能だからである。この点に関してはもうすこし、各本文の質的なちがいについてみていく必要があるであろう。

八田雅広氏はこの部分について次のように述べている。

冒頭部分をくらべてみると、内容には全くといってよいほど異同がないのだが、登場する読書家の描写が、冊子本では、使用人が多くいて、裕福に暮らしている、とのみ抽象的に表現されているにすぎないのが文化五年本では、耕作地をたくさん所有している豪農である、という具体的な表現になっている。

しかし、「家の子あまた召つかひ、年ゆたか也」と「山田あまたぬしづきて、年の豊凶にもなげかず、家ゆたかにて」という二つの表現の間に、八田氏のいうごとく「抽象的」と「具体的」という質的な差があるだろうか。私にはどちらもきわめて具体的な表現であるとは思われる。どうも、両者の違いを抽象的とか具体的という言葉で区別しようとする自体に問題があるではあるまいか。おそらく、この二つの異なる表現を生み出すことになったのは、三行目の「農家」と「人」との違いに起因すると思われる。つまり、それは抽象的とか具体的とかいうような問題ではなく、この家が農家であることを明示しておくか、単に富裕な家としておくかということから生まれた違いと考えるべきなのである。

しかし、この五行に見られる違いの大部分は、こうした指示する内容自体の違いによるものではない。八田氏も述べるごとく、「内容には全くといってよいほど異同がない」のであり、それゆえ、問題は、いかに叙述するかという所に存することになる。

三行目を例にとろう。五年本の「年を久しく住ふりたる」と冊子本の「年ひさしく住」という表現を区別する質的な違いはどこにあるだろうか。前者は、よくいえば丁寧な表現、悪くいえばいささかくどい表現といえる。すなわち、すでに「年ひさしく」と書かれているのであるから、そのあとは「住人」というだけで充分なはずで、「住ふりたる」というのは表現としては重複しているのではないかということである。そして、全体として冊子本が簡単であるという事実は、五年本のこのようなやや重複した表現を整理していった結果であるように思われるのである。そのことをもうすこし具体例に即してみようと、まず一行目、ここでは冊子本に「山里」の語がないが、これはすでに「古曾部」という場所が明記されているのだから、改めて「山里」と断わる必要はなかったと考えられる。また、「樹の葉も散はてゝ」というふうな季節もはつきり示されているのだから、二行目で「いとさむし」という形容を重ねて「いとさう・し」とまで表現する必要はなかったのである。また、五行目の場合でも「ゆたか」という語があれば、「年の豊凶にもなげかず」ということは当然予想される内容であるから省いたと考えられるのである。こういうふうに見ていくと、冊子本と五年本の内容的な違いは、結局、三行目の「農家」ということが表現として示されているか否かということに帰着するのである。

ただ、この五行分について見る限りでは（これからあとにもこういう例は多く出ると思うが）、卷子本と五年本を比較したときや「目ひとつの神」末尾の冊子本を他の稿本と比較したときのように、いずれがより優れているかということはそのほどはつきりと決められるわけではない。あくまでも比較した際の相対的な違いにすぎないのである。しかし、私としてはとりあえず、改稿のあり方として、五年本↓冊子本という方向が成り立つことが認められれば充分なのである。

・・・・・好みで、も求・・・、
常に文よむ事をつとめ、友をもとめず、

・は・・・・・に心ゆくまで・・・。
夜に窓のともし火 かゝげて 遊ぶ。

文事に心を寄せるこの家の主人の姿を描いたこの二行に関しては、「(文よむ事を)つとめ・好み」(「ともし火)かゝげて・心ゆくまで」などの語の選択の仕方に明瞭にあらわれているように、冊子本の表現の方に、趣味の世界に遊ぶこの主人の姿がより自覚的に示されており、表現としても一貫性を持っているといえる。

・親自のいさめに、・・・・との□□・也。
母なる人の、 いざ寝よや。鐘はとく鳴たり。

父のをしへたまひしに、子ひとつ過れば、 文よみて
夜中過て ふみ見れば、

眼いたむる也。腎気おとろふと
心つかれ、ついには病する由に、

もろこし人のいひし。

我 父 ののたまへりしを聞知りたり。

庭のをしへとつとめよ。□□□□□□□□
好たる事には、みづからは思たらぬぞと、

□□□□、□□□□□□□□
諫られて、いとかたじけなく、

□□□□□□□□承りぬとて闈に入。
亥過ては枕によるを、大事としけり。

この部分に関して、浅野三平氏は「母親の会話は、はるかに五年本の方が迫力がある」と評している。八田氏も

また、母親の諫めの言葉に、「いとかたじけなく」思って、亥の刻を過ぎると寝るのを「大事とし」たという表現に、読書家の性格描写がみられる文化五年本に対し、冊子本はそれがみられない。

と述べている。ただ、母親の言葉は、語る順序こそ異なっているものの、内容的にみて両

者それほど大きな違いはない。少なくとも「はるかに五年本の方が迫力がある」と評するほどの質的な違いは認められないと思う。そうした印象を生み出すのは、八田氏も指摘するとおり、母親の諫めを従順に聞き入れる描写があるかないかによるのであろう。

八田氏はこの例と先に引いた四行目の例から「冊子本の文章が推敲されて文化五年本の文章になったのは明らかである」と明快に断定している。しかし、問題はそれほど簡単に片付かないはずである。四行目の比較の仕方の問題があることはすでにふれた。この例でも、たしかに冊子本にはこの家の主人の「性格描写」はみられないわけだが、それがこの作品に是非とも必要なことであるかどうか。むしろ、不要と考えて省かれた可能性も考えられるであろう。少なくとも、それがあつた方が絶対に優れているとは決められないと思うのである。

それよりも、この部分では、冊子本に典拠を意識した表現が二箇所みられることに注意しておきたい。ひとつは「寝よとの鐘」という言い方で、これが『万葉集』に拠る表現であることは諸注指摘するとおりである。五年本は「いざ寝よや。鐘は」となっていて、特に『万葉集』とはかかわりを持たない表現になっている。もうひとつは、夜おそくまで起きていると病気になる、「もろこし人のいひし」と語るところである。これが中国の随筆『五雜俎』に拠るものであることはこれも諸注指摘するとおりである。五年本にはこれに対応する部分はなく、「我父のたまへりしを聞知りたり」とあるだけである。しかし、このことは、冊子本が後に書かれたとする私の立場からすればあまり有利な材料とはいえない。一般的にいつて典拠がはつきり指摘できる表現よりはそうでないものの方がこなれた表現だと考えられるからであり、目下のところ私は、この一般論に対して説得力のある反論を用意できないでいる。

さらに、この部分に関しては、冊子本が、冒頭の五行目からあとはある特定の一日というかたちで叙述が進められているのに対して、五年本はここではまだこの家の主人の日常的な習慣を記述していることになっており、特定の一日の記述となるのは次の段落からであるという違いも指摘しておくべきであろう。そうした構成面からみると五年本の母親の言葉はいささかすわりが悪く、そこに冊子本のごとく改稿される必然性があつたとも考えられる。

□□□□・・・ま・・・・・して

雨ふりてよひの間も物のおとせず。

目はまだねむらず。文に心すさびして詩つくり歌よむ。

こよひは御いさめあやまちて、丑にや成ぬらん。

・やみ・□□□□ □□□□の紙・・・。

雨止て風ふかず。月出て窓 あかし。

□□□□□□□□、□□□□、□□□□、

一言もあらでやと、墨すり、筆とりて、

□□□□□□□□、□□□□□□□□□□、

こよひのあはれ、やゝ一二句思よりて、

□□□□□□□□□、物の音絶たるに、

打かたふきをるに、虫のねとのみ聞つるに、

あやしくほそう鉦うつ音聞ゆ。あの音は

時々かねの音、 夜毎よと、

さき・にもいぶかしとおもひながら思ひ捨たり。

今やう・思なりて、あやし。

こよひは正にこそとて・・・てくま・・・巡れば、

庭におり、遠近 見めぐるに、

□□□□□□□□□、は・・・□□・・・所に

こゝぞと思ふ所は、常に 草も刈りはらはぬ隈の、

石一つ捨たり。此・・・した・こそ・・・定・・・て

石の下に と聞さだめたり。

・・・、等・出・・・て見よといふ。

あした、男ども呼 て、こゝ掘れとて掘す。

・・・、ほり・・・い・・・(以下欠)

三尺ばかり過て、大 なる石にあたりて、

まず、三行目をみよう。冊子本の「雨やみて、窓の紙あかし」と五年本の「雨止て風ふかず。月出て窓あかし」の表現の質的な違いに関しては、冒頭部について述べたことがより明確にあてはまるであろう。すなわち、「雨やみて、窓の紙あかし」という冊子本の表現は、五年本にある風がやんだことや月が出たということがらを内包していると考えられるからである。また、ここで、「雨やみて」といつているのだから、五年本の一行目にある「雨ふりて」という表現はあきらかに不要なもの、余計なものと言いうる。その意味で、この部分に関する限り、私はかなりの自信を持って、五年本から冊子本へと改稿されたと断定したい。

その他の部分を順にみていくと、まず二行目の「目はまだねむらず」と「こよひは御いさめあやまちて、丑にや成ぬらん」とは前段からの違いによるもので、五年本はここから特定の夜のことになるわけである。そのあと、冊子本の「文に心すさびして詩つくり歌よむ」とある部分は、五年本では五く七行目の「一こともあらでやと、墨すり、筆とりて、こよひのあはれ、やゝ一二句思よりて、打かたぶきをるに」となっている。この両者は純然たる異文とみるべきで特に優劣を論ずべき性格のものではない。このあと、鉦の音に気が付くまでのところは、冊子本では「物の音絶たるに、あやしくほそう鉦うつ音聞ゆ。あの音はさき・にもいぶかしとおもひながら思ひ捨たり。こよひは正にこそとて」と書かれ

ているが、五年本は「虫のねとのみ聞つるに、時々かねの音、夜毎よと、今やう・思なりて、あやし」となっている。この部分を比較した浅野氏は

言う迄もなく文化五年本の方が、磨かれた簡潔な文章となっている。つまり、自筆本の方には、草稿としか考えられないような粗雑な筆の走りを感ずるのである。と結論づけている。五年本が簡潔であることは確かだとしても、それが、「磨かれた」表現と評しうるかどうか。「虫の音とのみ聞つるに、時々かねの音、夜毎よと、今やう・思なりて、あやし」という五年本の文章は私にはいささかねじれたところのある、あまり素直でない表現であるように思われる。「虫の音だとはかり聞いていた音が、時々鉦の音に聞こえてくる。そういうえば、あの音は毎夜聞こえていたと、今やうと気がついたが、どうも不思議な事だ」という現代語訳と比べてみるとわかるようにかなり言葉を補わなければならず、特に「時々かねの音、夜毎よと」というあたりはいささか言葉足らずである。冊子本の論理的に筋の通った素直な表現と比べるといっそうその感を強くする。それゆえ、私には、冊子本の本文が「草稿としか考えられないような粗雑な筆の走り」で書かれたとは絶対に思われな。このあとも、五年本には「こゝぞとおもふ所は、……聞さだめたり」とか「こゝ掘れとて掘す」などいささかくどいと思われる表現が目につくが、それらはいずれも冊子本では訂正されているのである。

こうしてみてみると、いくつかの例外はあるものの、基本的には五年本から冊子本へという改稿の可能性は十分に成り立つと思われる。また、改稿というものの本質を考えればある程度の例外は存在するのが当然であつて、すべてがひとつの結論にむかつてきちんと説明しきれぬ方がおかしいともいえる。これを要するに、冊子本の本文をとりまく外的な要因はすでに五年本↓冊子本という改稿過程を示唆しており、本文自体からそれを否定すべき積極的な材料は発見されなかった、ということである。

四、『春雨物語』的本文とは

実は、本文に関する問題としては、五年本の写本三種の関係をどうみるかということを取り上げて置かねばならないのだが、すでに、「二世の縁」における異同の方は浅野氏によつて一覧表にまとめられているし、全体的な問題は深沢秋男氏が細かく検討している。いまのところ、私にはそれにつけ加えるべきだけの材料は揃つておらず、また、この問題は「二世の縁」だけに限定しうる性格のものでもないもので、いずれ、各稿本の仮名字母の問題を取り上げる時にでも改めてくわしく検討することにしたと思う。

ここでは、前節までの検討結果―特に冊子本と五年本の本文比較から出てきた問題をふまえて、個人的な印象をまじえながら『春雨物語』的文体とはいかなるものかについて、すこしばかり、考えてみたいと思う。

たとえば、教室で『春雨物語』をテキストとして読んでいく場合、富岡本がテキストの作品と文化五年本がテキストの作品の場合とではかなり感じが違うように思う。私の場合には、同じ作品の同じ箇所を相手を変えて毎週三、四回あるいはそれ以上読むことが普通であるのだが、富岡本がテキストの時はそれがさほど苦にならない。しかし、文化五年本であると、二回目以降は飽きてきたり文章のあらが目についてきたりする。あるいは私ひとりの感じにすぎないのかもしれないが、ともかく「血かたびら」や「目ひとつの神」を読

んでいるときの緊張感(?)のごときものを「二世の縁」や「捨石丸」を読むときには感じられないのは事実なのである。こういう経験からいうと、私は、文化五年本と富岡本の間にはテキストとしてかなりの質の違いがあると思わざるをえない。そして、その違いは、一口にいって、表現としての緊密さ、圧縮度の違いであると思うのである。

前節までの検討においては、冊子本と五年本の比較が中心であったから、富岡本の本文に直接言及することはなかったが、冊子本を富岡本と五年本の間位置するものと考えて、五年本からの改稿のなされかたをみていくと、内容にかかわらない部分では(何度かかなりしつこく指摘したように)、表現上の重複を整理し簡潔なものとなるようなかたちのものが一番目につく。そして、こうした作業を積み重ねていくことによって、五年本から富岡本への本文の質的な変化が生まれていったということが実感としていくらかわかったような気がしたのである。むろん、これが富岡本の文体的特徴のすべてでないことはいうまでもないが、今回の検討によってこうした見通しが得られたことはぜひとも書き留めて置きたいと思う。

そして、目下の私は富岡本を『春雨物語』の究極の姿と考え、そこに至る過程を解明することによって『春雨物語』的文体の本質に迫って行きたいと思っているのである。もっとも、それにしても、今回の結論はあまりにもささやかすぎるのだが……

(注)

1. 『二世の縁』攷(『上田秋成の研究』桜楓社、昭和50年2月刊)所収。初出は「春雨物語『二世の縁』攷」として「女子大國文」第35号に発表されたが、単行本収録にあたってかなり改訂が加えられているので以下の引用はすべて単行本による。
2. 「春雨物語『二世の縁』—成立過程と構想の変化—」(柴のいほり 第7号 昭和47年3月)
3. 『春雨物語』の成立—稿本群の検討を通じて—(近世文芸 第24号 昭和50年10月)
4. 「春雨物語『目ひとつの神』論」(福島大学教育学部論集 第39号 昭和61年3月)
5. 桜の墨書は「さふし」であり横に朱で「・」が加えられている。ここは、西・漆による。
6. 西のみ「つかれて」
7. 西「思ひたらぬ」漆「思したらぬ」
8. 漆のみ「あかるし」
9. 『春雨物語他三篇』(日本古典文学全集 小学館 昭和48年2月刊)の中村博保氏による現代語訳による。